

テキストのなかの明州

著者	高橋 公明
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	江南文化と日本：資料・人的交流の再発掘，復旦大学（上海），2011年5月27日-29日
ページ	31-43
発行年	2012-03-23
シリーズ	上海シンポジウム 2011 International Symposium in Shanghai 2011
URL	http://doi.org/10.15055/00001144

テキストのなかの明州

高橋 公明

1. 地図にひかれた2本の線

「清国十六省之図」（図1）という地図が名古屋市の蓬左文庫にある。

中国製の地図を基本にして、朝鮮半島や日本列島を充実させて、1681年（延宝9）に日本で木版印刷されたものである。すでに江戸幕府は日本人が中国へ行くことを禁じていた時代にあたる。この地図のなかで目につく特徴の一つは、海のなかに2本の赤い線が引いてあることである。いずれも東西に引かれており、北側にあるのは、「定海」と地名があるあたりの沿岸を西端とし、九州の南西岸を東端とするものである。この線にそって「此間、水程近く易し、明朝甚だこれを制禁す」と説明文が付されている。なお、「定海」の西隣には「明州津」という地名が見られる。南側のものは、「福州府」の沿岸の近くにある「梅苳所」（梅花所）を東端とし、澎湖島などをかすめて「大琉球」の南西岸を東端とするものである。

海のなかに線を引くことは多くの地図で見られる特徴であるが、概ね、海の道を示すものと考えられる。ただし、前近代の中国製の地図で、自らの支配地域を越えて、海のなかに線を引いて周辺諸国とのつながりを示すような表現はほとんど見られない。例えば、「大

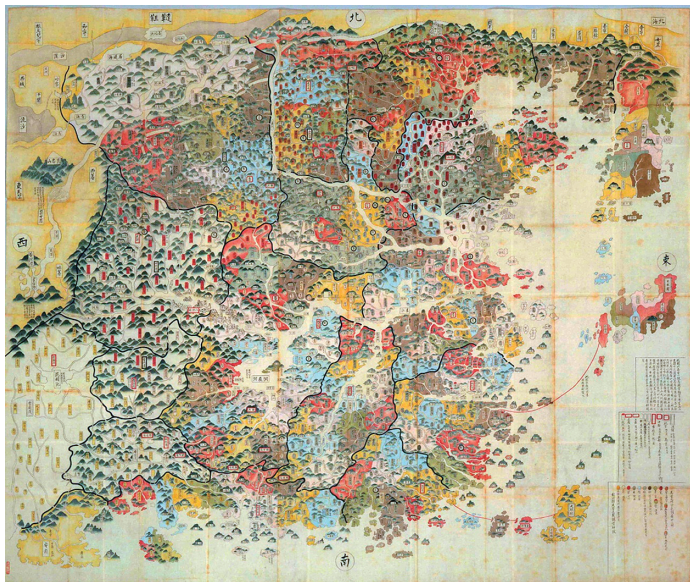


図1 清国十六省之図（全体図）。名古屋市立博物館蓬左文庫所蔵

明九辺人跡路程全図」(神戸市立博物館)という地図がある。1663年に清で出版された地図で、アジア全域、ヨーロッパ、さらにはアフリカまで描いている。系譜的には、いわゆる混一系世界図の子孫であることは明らかである(高橋、2010年)。この地図では、海のなかに「日本国」と題する短冊形の囲みがあり、「即ち古の倭奴地、浙江の東海中に在り」と日本を説明している。浙江省と日本の関係については認識しており、その点に関しては日本側と共通しているが、短冊が浙江省よりもさらに南に配置されており、地点を特定して線を引くほどの関心とはいえない。その意味で、「清国十六省之図」に引かれた2本の線は日本で追加されたと考えるべきであろう。

南側の線については、清の時代になっても密接な外交関係が継続していた琉球との関係を視覚化するもので同時代的にも現実を反映している。とはいえ、琉球ではなく、日本で作成された地図にこの関係が視覚化されたことの意義は大きく、この関係がきわめて広い範囲に知られていたことを示している。

北側の線については、「定海」そして「明州津」と密接な関係があるかのように表現されていることが重要である(図2)。

この地図のなかの地名について、例えば「浙江道」については該当する時代はないので除外するとしても、「南京」という地名とか、あるいは「北京」の赤い枠の上に「順天府」とあるのは、ともに明代以降のことで、地図全体としては宋や元の時代の地名は反映していない。また、寧波府の横には「甬東・明州・慶元」と古い地名の変遷が書き込まれてあり、寧波の地名の変遷を表現している。言い換えれば、別のところにわざわざ「明州津」と書き込む必要はないのである。このように、「清国十六省之図」は明代の地理的な状況を基本とする中国製の地図に、日本側は、わざわざ赤い線を入れ、「明州津」と書き込んだのである。本報告の出発点はここにある。なぜ、「寧波府」でなく、その古名である「明



図2 清国十六省之図(部分図)

州津」を「寧波府」と別のところに配置し、赤い線によって日本と密接に関連するかのよう
に描いたのか。この問いに対して、日本社会における地理的な中国認識の形成過程を見
ることによって答えようとするのが本報告である。

前近代の日中の文化交流史、外交史、さらには貿易史を視野に入れたとき、浙江省と九
州の関係がもっとも重要で、そのなかでも寧波と博多が両地域を結ぶ海上の道の両端で
あったことを否定することはできない。寧波は浙江省の東部にあり、余姚江（よようこう）
と奉化江（ほうかこう）が合流し、甬江（ゆうこう）になるところに位置する。ここから
25キロメートル下ると河口になり、定海がある。ここから東を目指すと九州に至る。もち
ろん、反対に、九州から西を目指せば定海に至り、さらにそこから甬江を25キロメートル
さかのぼると寧波に至る。ここは、唐の738年に南西にある四明山にちなんで明州と名付
けられ、821年、港市が設けられた。ついで南宋の1196年に明州は慶元府になり、元代も
慶元路と呼ばれた。明初において明州府の名が復活するが、1376年、寧波府とされる（斯
波義信、1992年、5～7頁）。

本報告の目的は、この寧波という港町の政治・経済・文化について具体的に検討するこ
とにあるのではなく、ここが日本社会のなかでどのように認識されているのかを検討する
ことにある。その具体的な素材として文学テキストに注目する。すでに確認したように、
寧波は、明州、慶元府、慶元路、明州府、寧波府と地名は変遷する。当然、そのなかでも
古名である明州という表現をテキストから探すことになる。地名としては8世紀からはじ
まるが、重要な港という機能に注目するならば9世紀から12世紀の末までの約370年間、
寧波は明州であった。日本では平安時代の初期から鎌倉時代の初めに相当する時期である。

ただし、日本の文学表現のなかに明州が現れるのは、さらに時代が下ってからである。
あらかじめ結論を示しておくならば、15・16世紀の能・狂言などの舞台表現のなかに、日
本にいる中国人、あるいは中国に行った日本人が登場するようになり、その筋立てのなか
で明州が頻出するようになるということである。この現象を通時的に位置づけるために、
その前後の時代における表現についても検討する。

2. 説話のなかの中国、震旦から唐へ

僧景戒編『日本国現報善悪霊異記』、いわゆる日本霊異記は、787年に編纂され、その後、
数度の改変を経て、820年ごろ、現在見るような説話集として改編された。漢文体ではあ
るが、現存する説話集ではもっとも古いものである（出雲路修、1996年、316～319頁）。
このなかには、日本人が朝鮮半島や中国大陆にわたる筋立てのものがいくつかある。

上巻の第6話「観音菩薩を憑念ひて現報を得る縁」は、老師行善が「高麗」（高句麗）
にわたり、仏教の学習に励むが、国が滅んだため、流浪の身となり、橋も壊れ、船もなく、
川を渡るすべもないため観音を念じていたら舟に乗った翁が迎えにあらわれ、ついで「大
唐」に至り、その翁を観音の現象したものと敬い続けたという話（17～18頁、読み下し
文を引用。以下同）、第17話「^{つはものわざはひ}兵の災に遭ひ^あ観音菩薩の像を信敬ひて現報を得る縁」は、
伊予国越智郡の大領の先祖越智直等8名が百済救援の戦いで捕虜となり、「唐国」に連行
され、そこで8名は観音菩薩を信じ、舟に像を乗せ、無事に筑紫に帰ることができたとい
う話（30頁）、第22話「^{つと}勤めて^{をしへ}仏の教を^{まな}学び^{もとめ}むことを^も求め^み法を^{ひろ}弘め^{たす}物を^{をは}利けて命終る時に

のぞ 臨^{あや}み異^{しるし}しき表^{ことのもと}を示す縁」は、若いころ仏法を「大唐」に求めるためにわたり、玄奘三蔵の弟子になった道照法師^{だうせうほふし}は、臨終において、光が部屋に充滿し、それが西に向かって飛んでいったという話（35～36頁）などがある。

いずれも「唐国」あるいは「大唐」と王朝名によって中国を表現し、それ以上に具体的な地名が登場しないことが特徴である。唐という王朝名が中国を代表するものとして説話にも登場するようになるが、特定の都市に言及するほど日本の知識人は中国の具体相に関心がなかったということであろう。また、次の今昔物語集で頻出する震旦という表現が見られないのは、いまだ仏教的な三国的世界観が浸透していなかったことを示している。

次に、12世紀前半に編纂された説話集である今昔物語集を例にとってみよう。この説話集には、千話以上という日本の文学史上もっとも多くの話が集められ、それぞれは和漢混交文で表現され、天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）という大分類のなかに編成されている。インド・中国・日本という大分類の順序は、仏教伝来のルートを示すもので、王法も含めた仏法による世界観を示そうとする壮大な構想のもとに各話は配列されている（小峯和明、1994年、543頁及び548～549頁）。本朝部の冒頭にある巻11は「本朝付仏法」と小分類され、仏教が日本に広まっていく過程に関わる話が収められている。そのなかには、日本人僧が中国に行き、仏教を学ぶ話がいくつかある。

巻11の第4話「道照和尚、亘唐、伝法相還来語」は、日本霊異記の上巻第22話と同じ系統で、道照和尚が「権者」（菩薩の化身）であったことを主題とする話である（1994年、18～21頁）。天智天皇の時代であること、道照和尚の出自・経歴、人物としての玄奘三蔵、道照和尚の中国でのありかた、臨終の様子などが日本霊異記より具体的に描写されている。地名に関しては、題目に「唐二亘リテ」という部分があり、天智天皇が道照和尚を召して、語った言葉として「震旦ニ玄奘法師ト云フ人有テ、天竺ニ渡テ正教ヲ伝テ本国ニ返来ル」とあり、その道照も天皇の命を受けて「震旦ニ渡ヌ」とある。震旦がここでは新たな表現として加わったが、都市などを示すそれ以外の地名は加わっていない。なお、道照は653年から660年にかけて唐に滞在し、玄奘三蔵に学んでいる。

第5話「道慈、亘唐、伝三論帰来、神叡、在朝試語」は、二人の優れた僧の話である（同前、21～23頁）。概要は、701年の遣唐使にしたがって入唐し、そこで三論宗を16年間学んだ道慈と、日本にしながら法相宗の優れた僧である神叡が、聖武天皇の前で仏教の知識を競わせ、後者のほうが優れていたが、両者の高度の仏識に感じ入った天皇は共に帰依し、前者に三論宗、後者に法相宗を学ばせたということである。ここでは前者の経歴に関して、「遣唐使粟田ノ道麻呂ト云ケル人ニ随テ、震旦ニ渡リニケリ」「震旦ニ渡テ、止事無キ師ニ随テ十六年ノ間学シタル者也」と「震旦」が使われているが、前例と同様にそれ以外の中国の地名は使われていない。

第7話「婆羅門僧正、為値行基、従天竺来朝語」は、聖武天皇の時代の話で、行基が文殊菩薩の化身であることを主題としている（同前、26～27頁）。行基は婆羅門僧正を難波津に出迎え、そこで両者が旧知であることに人々は驚く。両者は釈迦の前で再会することを誓ったことを歌の交換から明らかにし、なぜ婆羅門僧正が日本にまでやってきたのかということの説明とする。婆羅門僧正は「南天竺」の「迦毘羅衛国」の人で、釈迦の前での約束を果たすために、まず「文殊ハ震旦ノ五台山ニ御マス」と聞き、「天竺ヨリ震旦ニ至テ、五台山」に行くが、そこで「文殊ハ日本国ノ衆生ヲ利益センガ為ニ、彼ノ国ニ誕

生シ給ヒニキ」と知り、日本にやってきたのである。ここでは天竺から震旦へ、そして本朝へと、まさに仏教伝来のルートに沿って婆羅門僧正（この人も菩薩）は移動している。ここでは都市名ではなく、日本の僧にとっても聖地である「五台山」が婆羅門僧正の経過地点として示されている。これまでの例よりも地理的情報は具体的である。

第8話「鑑真和尚、從震旦^{かんじんわじやう しんだんよりてうにかいりつをわたせること}渡朝戒律語」は、題名が示すように、聖武天皇の時代に鑑真が日本にやってきた事情と、日本における死に至るまでの宗教活動を描いている（同前、28～30頁）。鑑真は「震旦^{やうしやう かうやうくゑん}ノ楊州、江陽県ノ人」で、老年になってから、日本から「震旦」にやってきた僧栄睿に熱心に乞われたため日本行を決意する。そこから日本につくまでの経緯は詳細である。「天宝十二年ト云ケル年ノ十月二十八日ノ戌ノ時ニ竜興寺ヲ出テ」(752年)と出発時と場所が明記され、「江頭^{えのほとり}」（長江のほとり）から「蘇州ノ黄泗ノ浦^{くわうし}」に至り、ここから出航し、薩摩の「秋妻ノ浦^{あきめ}」を経由して「天平勝宝六年」(754年)の「二月ノ一日」難波に到着する。ここでは「震旦ノ楊州、江陽県ノ人」「蘇州ノ黄泗ノ浦」とあるように、中国の特定の地域名が複数示されており、前話よりもさらに具体的である。

第9話「弘法大師、渡宋、伝真言教帰来語^{こうぼうだいし そうにわたりにてしんごんのをしへをつたへてかへりきたること}」は、空海の宗教的な達成を主題にしたもので、概要は、幼児の神童ぶり、仏教への覚醒、阿波、土佐、伊豆などでの修行、日本での仏教理解の限界、渡唐、密教への取り組み、文殊菩薩との出会い、帰国、嵯峨天皇のもとで真言宗の中心人物として活躍などである（同前、30～35頁）。このなかでも空海の出発の様子は具体的で、遣唐使にともなう、「延暦二十三年ト云フ年ノ五月十二日ニ唐ニ亘ル。年三十一也」(804年)とある。「先ヅ彼ノ国ニ蘇州ト云フ所至着ク。其年ノ八月ニ福州ニ至ル^{ふくしやう}」とあり、その後「長安」に行ったとする。まず、「蘇州」に到着し、ついで「福州」に至るとあるのは、典拠の誤読で、前者に行くことが先例であったが、後者に到着してしまったとすべきである。とはいえ、複数の港に関わる地名があることは重要である。なお、この話には震旦が出てこない。空海が日本での仏教理解の限界を悟り、中国行を決意する表現は、「我唐ニ渡テ、此ノ教ヲ習ハム」とあり、その後の経過においても同様である。いうまでもないが、題目のなかの「宋」は「唐」とすべきである。

第10話「伝教大師、亘宋、伝天台宗帰来語^{でんけうだいし そうにわたりにてけんみつのほふをつたへてかへりきたること}」は、最澄の宗教活動を主題としたもので、概要は、天台宗を弘めようとして発願、渡唐、唐での修行、帰国してからの宗教活動、天台宗の興隆などである（同前、36～38頁）。前話と同様、ここでも震旦は出てこず、「延暦二十三年ト云フ年、唐ニ渡ヌ」(804年)とあるように、唐だけである。また、都市名なども記されていない。これも題目のなかの「宋」は「唐」とすべきである。

第11話「慈覚大師、亘宋、伝顕密法帰来語^{じかくだいし そうにわたりにてけんみつのはふをつたへてかへりきたること}」は、円仁の宗教活動を主題としたもので、概要は、生誕時の奇瑞、比叡山行き、最澄の弟子となり円仁の名乗り、最澄の死後の渡唐(835年)、各地での修行、政治的な仏教弾圧、逃亡と頼頼城の苦難、救済、帰国(847年)して顕密の弘法などである（同前、38～42頁）。前話同様、ここでも震旦は出てこない。「我レ唐ニ渡テ、顕密ノ法ヲ習ヒ極メム^{ひきは}」と決意して、「承和二年ト云フ年、唐ニ渡ヌ」(835年)とあるだけである。都市名はないが、「天台山」「五台山」と仏教修行の聖地を記している。これも題目のなかの「宋」は「唐」とすべきである。

第12話「智證大師、亘宋、伝顕密法帰来語^{ちしやうだいし そうにわたりにてけんみつのはふをつたへてかへりきたること}」は、円珍の宗教活動を主題としたもので、概要は、空海に連なる血筋の母、流星と懷妊、幼児の神ぶり、比叡山入り、渡唐(851年)、琉球漂着、福州着、天台山などでの顕密の修行、帰国(858年)、修行した寺の火事

を日本から法力で消したことなどである（同前、42～47頁）。ここでは題目・本文とも「宋」となっているが、「唐」とすべきである。これまでの話のなかで渡唐の記述がもっとも具体的である。「宋」に渡って「天台山」「五台山」で修行をしようと決意し、「仁寿元年四月ノ十五日ニ京ヲ出テ鎮西ニ向フ。三年八月ノ九日、宋ノ商人良暉あきびとりやうき」（853年）の船に乗るが、強風で「人ヲ食フ国」である「琉球国」に漂着する。そこから円珍の法力によって危機を脱し、「大宋、嶺南道、福州、連江県れいなんだう れんかうくめん」に到着した。福州は嶺南道ではないが、きわめて具体的に地名が記されている。ここでも基本的に震旦は出てこないが、末尾に山門と寺門の争いにふれ、これを正当化するために「天竺・震旦ニモ皆然ル事也」と弁解している箇所だけで使われている。

以上、巻11のなかの日本僧の中国渡りを中心にして、中国がどのように記述されているかを見てきた。概ね、次のような傾向が指摘できる。第一に、日本霊異記では見られなかった天竺・震旦など中国語にとっても外来語を用いてインド・中国を示す例が多いこと、第二に、時代が下るにつれ、中国の都市名などが記述される事例が増えること、第三に、それにしたがって、震旦の例が減り、唐・宋など王朝名が増えること、第四に、9話以降の時代は、明州の港市化も実現していたにもかかわらず、明州についての記述はなかったことである。とくに史実においては、最澄の乗った船は明州に入港しているが（日本後紀、延暦24年6月8日条、42～43頁）、そのような記述は見られなかった。

いうまでもないが、震旦とは「秦の土地」を意味するサンスクリット語の音を漢字音で借用したものとされており、中国語にとっても外国語である。これが日本では天竺とともに使われ、その異化作用により宗教的、ここでは仏教的な表象となったと思われる。その言葉を用いることは、おそらく中国を宗教的な空間と見ることに対応するのであろう。そして、それをあえて使わなくなるということは、中国をむしろ「唐」、「宋」という王朝に表象される俗的な、いわゆる政治的な空間とする意識のほうが強化的な強化されたということではないだろうか。同時に、震旦というような中国全体ではなく、「天台山」「五台山」など特定の地域を仏教的な聖地として特化する観念の強化も見逃すことはできない。

また、明州については今昔物語集の巻24から1例だけ確認することができた。

第44話「安陪仲麿、於唐読和歌語」あべのなかまろ たうにしてわかをよむことは題名が示すように安陪仲麿の話である（1993年、464～465頁）。概要は、遣唐使として渡唐した仲麿が、長年帰国しなかったので日本から迎えが来て、帰国を決意し、「アマノハラフリサケミレバカスガナルミカサノ山ニイデシツキカモ」と望郷の歌を詠み、これを帰国後披露したというものである。まず指摘すべきは、仲麿は帰国しようとしたが、安南に漂着し、帰国することなく唐で亡くなっているというのが史実という点である。さて、本文のなかで、帰国を決意し、中国の人々と別れの宴を「明州ト云所ノ海ノ辺」でするという記述がある。仲麿が帰国しようとしたのは753年で、この時期にはすでに明州という名称はあり、矛盾はない。ただし、この「明州」という地名が、仲麿の同時代から伝わったものか、それとも仲麿帰国説が伝説となった後世に再構成された記憶なのかは定かではない。

3. 舞台の上の唐人

今昔物語集が編纂されてから数世紀の時がたち、15世紀になると、能・狂言という演劇

的な表現がしだいに人気を博し、多くの人々に楽しまれるようになった。そのため、扱われる題材は、人々の生活に具体的に関わるものとなった。そのなかに唐船という能がある。それもまた当時の世相を反映したものであった（562～566頁）。

明州の祖慶官人は、日本船と唐船の争いに巻き込まれ、箱崎（現在の福岡市）に連れこられ、箱崎某に召し使われていた。箱崎某は牛馬を多く持ち、祖慶官人に牛馬の世話を命じた。13年後、明州から二人の子「そんし」「そゆう」がやってきた。多くの宝を差し出し、父を帰国させようとする。また、祖慶官人には日本人の妻との間にできた二人の子もいて、いっしょに帰国しようとする。ところが、箱崎某は日本で生まれた子の帰国を許さず、祖慶官人は双方の子にはさまれ愁嘆場となる。そこで箱崎某も折れ、全員で明州に向かい、帰国することになる、という話しである。

本報告でもっとも注目すべきなのは、明州出身の祖慶官人が登場し、明州から息子たちが迎えにきて、箱崎で生まれた子とともに主人公は明州に帰るという設定になっていることである。この点は後述するとして、それ以外で注目すべき点を具体的に示してみよう。

第一に、箱崎某が貿易船をもち、されに「牛馬を数多持て候程に、彼の祖慶官人に申付野飼をさせ候」と言っている点である。これは箱崎某の生業が商人であるとともに、牛馬を多く必要とする馬借あるいは車借、すなわち運送業であることを示している。博多湾の東側に位置する箱崎津の商人兼運送業者という、まさに「らしい」設定である。第二に、船争いによって人質となった人物を祖慶官人という、いかにも庶民ではないという役名にしていることである。この設定によって「野飼」をする祖慶官人の哀れさが強調される。この船争いは、いわゆる倭寇を背景にしたものと考えられるが、これに関して、この作品の成立年代を15世紀前半とする説と、16世紀前半とする説がある。前者は作者を観世元雅と推定し、後者は祖慶官人を寧波の乱の当事者宋素卿から創作されたのではないかと推定している（西野春雄、1998年、561頁）。第三に、日本で生まれた子供達に、「唐土と日の本」のどちらが優れているかと聞かれ、祖慶官人は「唐土（もろこし）に、日の本（ひのもと）を喩ふれば、只今尉が率いて行、九牛が一毛よ」と答えていることである。これもまた偉大な国からきた人に「野飼」をさせるという哀れな境遇を意識させる設定である。

以上を前提に、明州など中国がどのように語られているのか確認してみよう。

ワキの箱崎某が「唐土」（もろこし）での舟争いの次第を述べ、祖慶官人を13年間にわたって留め置き、牛馬の「野飼」をさせていると名乗る。ついで、中国から来た子のひとり「ソンシ」が「是は唐土明州（ミヤウジウ）の津に、そんし・そゆうと申兄弟の者なり」と名乗り、兄弟は箱崎に父を捜しに来た事情を歌う。そのなかで、「明州河を押し渡り、明州河を押し渡り」と繰り返している。ついで箱崎某と「そんし」「そゆう」との掛け合いがあり、場面は転換してシテの祖慶官人が自ら境遇を説明する場面となり、「是は唐土明州の津に、祖慶官人と申者なり」とはじめる。その後、両者が会い、ヤマ場となり、ついに日本の子二人も一緒に帰ることになる。

ある意味、決まり文句のように「ミヤウジウ」という声が発せられるのである。これが舞台で演じられるとき観衆に与える影響はきわめて大きいと思われる。このように、中国の入口、あるいは出口という意味を持つ記号化した地名として「明州」が現れたのである。唐船は現在でも上演されることがあり、江戸時代、明治時代などをくぐり抜けて現在まで人気を保ち続けてきている。

当時においても唐船の人氣があったことを示す例として、後日談が作られたことを挙げることができる。現在は廃曲になっている箱崎物狂である（132～141頁）。箱崎某の許しを得て、日本人の子も一緒に中国に戻ってしまった。その後、箱崎に残した母を案じた日本生まれの子「祖範」「祖竹」は、明州から船を仕立てて箱崎に向かう。日本名を「千代若」「千代満」というこの兄弟は、箱崎で「狂女」となってしまった母と会う。何とか説得して母を船に乗せ、めでたく明州に戻るという話である。このような後日談ができること自体、唐船に人氣のあったことを示している。

ここでは祖慶官人と日本人妻との間にできた子に中国名と日本名があることが興味深い。明州から船を仕立てて箱崎に向かうときには「祖範」「祖竹」と名乗っているが、箱崎に着き、「箱崎殿」から「おことは千代若・千代満（みつ）にてはなしか」と聞かれ、「さん候」と答えている。多くの境界人がそうであるように、状況に応じて名前も変えることができるのである。

ここでも「明州」は頻出する。「祖範」・「祖竹」が古里の母はどうしているのだろうと、この話のテーマを歌い、ついで「祖範」は自分たちを「是は明州の津に。祖慶官人と申人の子に」と紹介する。中国古典の『二十四孝』を引きながら、母に会いたいという気持ちが歌われる。そこで二人の子と父である祖慶官人の問答になるが、ついに二人は父から暇を給わる。そこで「明州河を押わたり。明州河を押わたり」と歌われる。これは河を下る表現である。ここからがヤマ場で、二人と狂った母が出会い、ついに母を船に乗せて帰国することになった。ここで「船は明州に、着にけり」と結ばれる。ここでも唐船と同様に、「明州」は決まり文句になっている。

さらに唐船の人氣の高さを示すものとして、筋立てを基本的にうけついで狂言として唐人子宝がある（193～197頁）。唐人の扱いに細かな違いがあり、唐人を抱えているのは通訳として使うためだが、その仕事がないので牛馬の世話をさせていることになっている。通訳という、より具体性を感じさせる設定を加えている。日本人の子は登場せず、当然ながら単純な筋立てになっている。そしてこの狂言の大きな特徴は、唐人とその子の会話が中国語で行なわれるという点にあった。秋山謙蔵が紹介した台本によると、例えば、「ホウライホウライ」「チントンリヨヒイハンチントンリヨヒイハン」「クハイシイライクハシイライ」「チントンリヨ」というようなものであった（1935年、304～333頁）。現在、読める台本ではもう少し分量が少なく、秋山の紹介したもののほうがさらに古いのかもしれない。単に観客を笑わせるために中国語らしく発音しただけかもしれないが、中国語の何か、例えば浙江省あたりの発音からカタカナに移したものであるという可能性も捨て切れず、秋山も当時の観客はある程度の中国語を理解したのではないかと推定している。

また、中国語の会話は、狂言の茶盃拝（ちゃさんはい）でも登場する（330～333頁）。茶盃拝は、13年前に捕らえられ、箱崎に連れてこられた茶盃拝という唐人と日本人の妻の夫婦喧嘩を題材とする話である。ついに国際結婚まで狂言の題材となったのである。ここでもいくつかの場面で中国語があるいはそのような発音の台詞がある。同じく狂言の唐人相撲（あるいは「唐相撲」）は、日本人の相撲取りが「入唐」し、「帝王」に奉公する話である（247～248頁）。舞台が中国とする狂言まで作られたのである。ここでは暇乞いをする相撲取りに、「帝王」の前で「名残」に相撲を取っていけと命じられ、次から次へと相手をし、最後には「帝王」まで相手をするという、舞台上に多くの演者が上がり、動きの

ある、にぎやかな演目である。いずれも明州は出てこないが、筋立てのなかで中国人、あるいは中国が重要な役割をもっていることを特徴としている。

なお、明州についてはさらに追加できる。15世紀後半から17世紀初頭にかけて流行した幸若舞（曲舞）という芸能があった。この幸若舞で用いられる語り用の台本（詞章）を読み物用に転用したものを舞の本といい、慶長期、寛永期に出版された（麻原美子、1994年、589頁、599頁）。ここにはかつて演じられたが、その詞章が不明のものが含まれている。したがって、舞の本のなかの表現は、幸若舞でも使われていた可能性があり、他の舞台芸能と同じように大きな影響力を想定することができる。そのなかに、大職冠（たいしょかん）という藤原鎌足の次女が唐の皇帝の后になるという話があり、そのなかで、次女の「紅白女」（こうはくによ） およびその一行は「難波の浦」から出港して「大唐の明州の湊」に着く。また、父鎌足が建てた興福寺に仏具・法具を送ろうとして、これもまた船は「大唐の明州の湊」から出港している（15～42頁）。同じく笛の巻という牛若のもっていた笛の由来を尋ねるという話があり、ここでも弘法大師は「明州」から帰国している。

なぜ明州という地名が消えて久しい15世紀以降、舞台などで上演される芸能のなかに「明州」が現れ、それが中国の玄関であるかのように設定されるようになったのか、十分には説明できないが、この時期以降、中国の玄関として、寧波ではなく、その古名である明州をその象徴とする認識が日本社会のなかで広まっていったことは間違いない。

4. 明州・慶元・寧波

榎本渉は、9世紀から14世紀までを対象として、この時代に日本との交通で利用された中国の港について網羅的に検討し、それを通じて東アジア海域における明州市舶司の位置を考察し、明州が対日本・高麗貿易の貿易港としての地位を確立する過程を跡づけるとともに、明州が最終目的地というよりも、むしろ中継港であったことも明らかにした（2007年）。とりわけ、表1「対日交通に利用された中国側港湾（800～1349年）」（30～39頁）は本報告にとって有益で、多くの僧が中国から日本へ、日本から中国へ移動し、それらの多くが明州を経由していることが確認できる。この点だけでも、後世の日本で、明州が中国の玄関としての象徴的な地位を得たこと的前提条件となるのかもしれない。ただし、なぜ慶元や寧波でなく、明州なのかという点については、さらに検討が必要である。

榎本の作成した表1の主要な目的が、地理的にどの港を出港・入港したのかを明らかにすることにあるため、史料上、明州、慶元、寧波などの名称における差異があったにしても、すべて明州に統一されている。そこで表1で典拠とされている史料のなかでも日本の史料に注目し、入港地・出港地をどのように表現しているかを、具体的に確認する。なお、ここで検討する史料は、広い意味では文学であるが、榎本が史実を復元するために用いていることでも明かなように、政府、公家、僧などが記した記録・日記で、先に紹介したような、説話、舞台表現のための脚本、あるいは木版印刷して広い読者を想定している読み物とは異なり、テキスト自体が広く読まれることを想定されるものではない。

いうまでもなく、1196年以前の正式名称は明州であり、それ以前に成立した日本の史料においては明州以外の表現はでてこない。空海や最澄が渡航したことで知られる804年の遣唐使について日本後紀が一行の経路を詳細に記しており、そこで「明州」は頻出する（延

暦24年6月8日条、42～43頁）。同じく正史である日本三代実録にも僧宗叡の卒伝（元慶8年3月26日条、555頁）があり、866年に宗叡が唐から帰国することについて「（貞観）八年明州望海鎮に到る」と、出港の事情を記述している。

渡唐僧あるいは渡宋僧も日記を残しており、いずれも当事者であり、「明州」を地名として用いている。例えば、838年（承和5）に遣唐使の一員として入唐してから、847年（承和14）に新羅人の商船によって帰国するまでを記録した円仁の入唐求法巡礼行記（会昌2年5月25日条、442頁）、1072年（延久4）に宋商船に乗って渡宋し、翌年、自らは宋に残り、弟子たちを宋商船に乗せて帰国させた成尋の参天台五臺山記（熙寧6年4月12日条、201頁。同年6月8日条、812頁）がある。日記ではないが、1198年（建久9）に栄西が著した興禅護国論では、1168年（仁安3）の自身の渡宋について「予、日本仁安三年戊子春、渡海之志あり、鎮西博多津に到る。……四月渡海し、大宋明州に到る」（111頁）としている。

公家の日記においても同様である。右大臣として、政権の中枢で長期間にわたり活躍した藤原実資の日記である小右記では、1019年（寛仁3）、日本に来る前に逆風で「大宋国明州」に漂着したという高麗人「未斤達」の報告（小右記5、寛仁3年6月21日条、157頁）、1027年（万寿4）、「大宋国福州商客陳文祐」の来日に関する記述（小右記8、万寿4年8月30日、23～24頁）において、いずれも「大宋国明州」が用いられている。左大臣として活動した源俊房の日記である水左記では、1081年（承暦5）、宋商人に関する記述（承暦5年10月25日、155頁。承暦5年＝永保1年）、同じく大宰権帥であった源経信の日記である帥記でも同じ宋商人の記述（永保1年10月25日、133頁）において、いずれも「大宋国明州牒」という外交文書についての言及があった。これらは、政府高官として外交に関わっていたことを反映している。

以上、当事者、あるいは関係者による記述は、当然ではあるが、事実を事実として表現したものである。これらが日本の一部の人々に明州という地名を深く記憶させたことの十分な証明になる。ただし、そのような認識の広がりについては十分とは言えない。

同じ日記でも、南北朝期の明法官人である中原師守の師守記は、後世、職務遂行のために書かれたものである。例えば、「貞治六年五月九日」（1367年）条に長文の記事がある。これは高麗使節が来日したため、答申のために外交の先例を時代別に引き写したものである。それらのなかに、1097年の「承德元年九月、大宋国明州牒、到来す」、1117年の「（永久）五年九月、大宋国明州牒、到来す」、1172年および1173年の「承安二年秋、宋朝牒状到来す。状に偁く。大宋国明州□海制置使司、日本国太政大臣に牒す。……（承安三年）二月、入道太政大臣宋国辺牒状を送りて云く。日本国沙門静海、大宋国明州沿海制置使王に牒す」（176頁）など、具体的に外交文書としての牒について引用されている。なお、これらの記述のなかに、同時代においては「明州」は「慶元府」あるいは「慶元路」であるというような注記はない。このように古い記録を二次的に、そのまま引用しており、明州に関する認識としてはより広がった根拠といえるのではないだろうか。

また、1322年に書かれた虎関師錬の元亨釈書は仏教史の著作であり、様々な典拠を参照したと思われる。したがって、そこに明州に関する記述があれば、その認識のさらなる広がりを示すものといえる。もちろん、先述したような、804年の最澄（33頁）、866年（64頁）の宗叡に関しては、いずれも唐代であり、当然、「明州」とされている。宋代においても、

1168年の栄西の入宋については「仁安三年夏四月」「宋国明州界に著く」（42頁）とあり、その帰国については、「奉国軍に到る」とし、「今、慶元府と改める」という注記が付けられている（43頁）。なお「奉国軍」の「軍」とは宋代の行政単位の一つで、「奉国」は明州を示している。日本の史料で「慶元府」と出てくるのは珍しいことだが、これはそのなかの一例である。

このような記述が現れたからといって、それ以後の記録に地名の変更が反映されるわけではなかった。1235年、慧日山弁円（字円爾）の南宋への渡航について、「嘉禎元年、海に泛びて十寅夕にて宋の明州界に著く」（110頁）とあり、1252年の鷲峯覺心の南宋からの帰国について「明を發ち、博多に着す。乃ち建長四歳也」（102頁）と慶元を使わず、「明」としている。「明」はおそらく四明か明州を表すと考えられる。また1265年の兀庵普寧の南宋への帰国については、「文永二年也。風帆恙無く明州に達す」（106頁）と「明州」としている。すでに慶元になっていることを知っていながら、典拠からそのまま写して明州という表現を使い続けているのである。

いずれも僧伝の類であるが、元亨釈書と同様に、すでに慶元府あるいは慶元路になっていた時代の記述でも似たような例は見られる。神子栄尊の栄尊大和尚年譜（1275年成立）では「嘉貞（禎カ）元年乙未。師歳四十一……平戸を出る。十昼夜を経て、直に大宋明州に到る。即ち宋理宗端平二年也。……師歳四十四。徑山を辞し、商舶に乗り、明州を出る也。」（296～297頁）と1235年の出国と1238年の帰国のどちらにおいても経由している港を「明州」としている。無学祖元の仏光国師語録の巻九では「遂に淳祐甲辰年に於て、志を發し、海を航り、山に梯り、乃ち四明に抵る」（152頁）と、渡日前の祖元の中国での移動の経路を記述し、1244年に「四明」に到着したと表現している。明州の典拠となった四明山にまでさかのぼっており、ある意味、雅な地名として「四明」を選んでいるのである。

さらに時代を下り、1470年に成立した善隣国宝記でも明州という地名は頻出する。この時代、慶元という地名も過去のものとなり、かつての明州は寧波と呼ばれている。善隣国宝記では元亨釈書が最も頻繁に引用されており（田中健夫、1959年、160～162頁）、当然、その部分では「明州」という記述がそのまま写されている。例えば、最澄と宗叡の入唐（48頁、54頁）、栄西と弁円（円爾）の入宋（66頁、72頁）などである。さらに「御宇多院建治元年」（1275年）条に、「日本古記に曰く」として「正月十八日、蒙古人二人、高麗人一名、明州人一名、已上四人を鎮西より送る」という記述を載せている（77頁）。文永と弘安の役の間のことで、元からの使節についての記述で、江南からの人を「明州人」としていることが注目される。「日本古記」については不明だが、江南地域を「明州」で代表させており、この地名が日本社会へ広く浸透していたことが示されている。

以上、管見の限りではあるが、地名が明州であった時代はもちろん、それ以降についても、日本で書かれた史料においては明州にこだわり続ける傾向があることを確認してきた。おそらく、仏教僧に関わる記述を中心に明州という地名は蓄積され、それが仏教僧だけでなく、公家にも伝わり、後世まで引用され続けた。このような状況の中で、能や狂言などの舞台の表現にまで影響を与えてきたのであろう。

5. 表象としての明州

日本霊異記（9世紀はじめ）や今昔物語集（12世紀前半）などの説話集が成立した時期、寧波は明州と呼ばれていた。しかしながら、日本から中国へ、あるいは、中国から日本へ渡る話のなかに、唐や宋という王朝名、震旦というインド風の呼び方、あるいはほかの都市名はあるにもかかわらず、明州という地名は出てこない。それに対して、ほぼ同時代の政府や公家のように外交に関わった記録、僧など中国に渡航したものの日記には、数多くの「明州」の事例があった。寧波が明州であった時代はもちろん、それ以降、慶元などに名前が変わった時代においても「明州」という表記は日本の史料のなかに数多く見られた。この時代を通じて、明州は日本社会のなかで少数の人々に記憶されるようになってくる。しかしながら、説話など、より広い層に伝わるジャンルにまでは広まっていなかった。

公家の日記である師守記、仏教史の著作である元亨釈書などに代表されるように、14世紀になると、先例や歴史的な事跡を調べることで、「明州」という地名は先行する文献から引用されるようになる。おそらく、このような経緯を通じて、明州は日本社会のなかに少しずつ広まっていったと考えられる。

このような過程を経て、15世紀以降、能や狂言などの舞台芸術のなかで、演者は「ミヤウジウ」という言葉を発するようになるのである。現実には寧波と呼ばれるようになっていたこの都市を、日本社会の広い層の人々は「ミヤウジウ」という音で記憶するようになる。もちろん、「明州」という文字も、能・狂言の脚本から広がり、江戸時代初期の舞の本のなかに残されるようになった。日本社会のなかで明州は中国の出入口を表象する表現となったのである。江戸時代、中国製の地図を複製するとき、赤い線を書き加えて日本と明州の関係を強調したのは、その表象が日本で広まっていたことのひとつの証拠といえる。

参考文献：

- 麻原美子「解説」（『新日本古典文学大系59 舞の本』岩波書店、1994年）、589～607頁。
秋山謙蔵『日支交渉史話』岩波書店、1935年。
出雲路修「解説」（『新日本古典文学大系30 日本霊異記』岩波書店、1996年）、301～325頁。
榎本渉「明州市舶司と東シナ海海域」（『東アジア海域と日中交流——9～14世紀——』吉川弘文館、2007年）、28～61頁。
小峯和明「『今昔物語集』の誕生と未刊」（『新日本古典文学大系36 今昔物語集四』岩波書店、1994年）、543～563頁。
斯波義信「港市論」（荒野泰典他編『アジアのなかの日本史 Ⅲ海上の道』東京大学出版会、1992年）、1～34頁。
高橋公明「『混一疆理歴代国都之図』と『海東諸国総図』」（荒野泰典他編『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、2010年）、273～285頁。
田中健夫「善隣国宝記の成立事情とその背景」（『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、1959年）、148～176頁。
田中允「解説」（『未刊謡曲集 続11』古典文庫、1993年）、18～21頁。
西野春雄「梗概」（『新日本古典文学大系57 謡曲百番』岩波書店、1998年）、561頁。

史料：

栄尊大和尚年譜：太田藤四郎『続群書類従 第九輯上』続群書類従完成会、1932年。

元亨釈書：黑板勝美編『新訂増補 国史大系31 日本高僧伝要文抄・元亨釈書』吉川弘文館、1965年。

興禅護国論：市川白弦・入矢義高・柳田聖山校注『日本思想大系16 中世禅家の思想』岩波書店、1972年。

今昔物語集：池上洵一校注『新日本古典文学大系35 今昔物語集三』岩波書店、1993年。

小峯和明校注『新日本古典文学大系36 今昔物語集四』岩波書店、1994年。

参天台五臺山記：近藤瓶城編『改定史籍集覧 第廿六冊』1984年。

小右記：東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記五』岩波書店、1969年。東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記八』1976年。

帥記：笹川種郎編『史料大成 水左記・帥記 5』内外書籍、1936年。

水左記：笹川種郎編『史料大成 水左記・帥記 5』内外書籍、1936年。

善隣国宝記：瑞慶周鳳『善隣国宝記』国書刊行会、1975年。

大職冠：麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系59 舞の本』岩波書店、1994年。

茶盃拝：北原保雄・吉見孝夫『狂言記拾遺の研究』勉誠社、1987年。

唐人子宝：古川久校注『日本古典全書 狂言集 下』朝日新聞社、1956年。

唐人相撲：北原保雄・吉見孝夫『狂言記拾遺の研究』勉誠社、1987年。

唐船：西野春雄校注『新日本古典文学大系57 謡曲百番』岩波書店、1998年。

入唐求法巡礼行記：小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究 第三卷』鈴木学術財団、1967年。

日本後紀：黑板勝美編『新訂増補 国史大系 4 日本後紀・続日本後紀・文徳天皇実録』国史大系刊行会、1934年。

日本三代実録：黑板勝美編『新訂増補 国史大系 3 日本三大実録』吉川弘文館、1966年。

日本霊異記：出雲路修校注『新日本古典文学大系30 日本霊異記』岩波書店、1996年。

箱崎物狂：田中允編『未刊謡曲集 続11』古典文庫、1993年。

笛の巻：麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系59 舞の本』岩波書店、1994年。

仏光国師語録：鈴木学術財団編『大日本仏教全書 第四八巻 禅宗部全』巻九、鈴木学術財団、1971年。

師守記：藤井貞文・小林花子校訂『史料纂集 師守紀 第九』続群書類従完成会、1975年。